

講義年月日 2008年1月28日

講演者 三井 悟氏（東海大学中央図書館課長補佐）

テーマ 地域社会に根ざす大学図書館に向けて

- 近隣住民への利用者サービス拡大の歩み -

1. 東海大学について

2007年度5キャンパス、13学部、72学科・専攻・課程が、2008年度には現在の九州東海大学・北海道東海大学が統合され、10キャンパスとなる。

付属図書館は、現在、中央（湘南4館）、代々木、伊勢原（2館）、沼津、清水の9館が2008年度は14館になり、現在システム統合中である。蔵書数は2007年3月31日現在、図書：2,032,474冊、雑誌：27,591種類である。なお、蔵書検索システムには付属図書館以外にも学園の短大図書館が参画している。

2. 地域住民への公開に至る要因

生涯学習の一翼を担うべく、大学の教育研究施設を開放する。

地域との相互協力協定から、開かれた大学が要請され、大学の学術情報、資料を社会に開放するために公開する。

学術情報の資源共有の社会的要請に応えるため、公共図書館との相互協力体制、ネットワーク化のために公開する。

3. 大学図書館が地域開放する意義

情報量の増大、利用者の要求の多様化・高度化などで、生涯教育支援と地域連携という立場から社会貢献できる。

相互協力やネットワーク構築など、異種図書館のメリットを認識した協力関係を築く。大学の特性に応じた特化された図書館として地域に存在することが、学内利用者への図書館サービス向上に繋がる。

4. 公開にあたっての懸念事項・課題

大学当局と教員の理解を求め、学内利用者の資料提供サービスを維持しながら、学外者にもサービスできるか。

公開サービスが大学図書館の一方的奉仕にならないか。

貸出・申請受付など業務量の増加に対応できるか。

専任職員不在時のセキュリティ上の問題はないか。

5. 地域公開の経緯

1983年1月「秦野市と大学で提携事業」を締結、1985年11月「平塚市と大学で交流事業」を締結し、その事業の中に『施設の相互利用協力』があり、1987年4月に平塚市図書館と、1988年1月に秦野市立図書館と中央図書館が相互利用協力を締結した。公開の内容は、図書館資料の相互貸借、相互複写（学内料金での提供）、市民の大学図書館利用（利用資格は市民で満18歳以上・市図書館利用登録者・特定の研究主題あり）1993年10月に秦野市立図書館と、1994年3月に平塚市図書館とOPAC端末を相互に設置し、相互利用の促進を図った。1999年7月wwwOPACの運用開始に伴い端末を撤収。

地域の高校生へは 1988 年 8 月から夏期休暇中の公開を実施し、2007 年 8 月まで継続して実施している。湘南校舎 4 図書館以外、清水図書館・沼津図書館でも実施している。

6 . 地域公開サービスの見直しと拡大サービスの概要

地域住民に対する館外貸出の実施と、申請から許可までの利用登録手続きの簡素化。公開する本学図書館の拡大と、相互利用協力を結ぶ公共図書館との協力内容の見直し。2005 年 8 月から実施し、対象地域を平塚市・秦野市から、伊勢原市・大磯町・二宮町を加えた。利用資格は同様。公開する本学図書館は、湘南校舎 4 図書館に伊勢原校舎 2 図書館を加え拡大。

利用者区分は、A 会員は無料で、館内閲覧、資料複写ができ、館外貸出は不可。B 会員は年間 1,000 円で、館内閲覧、資料複写、館外貸出(湘南校舎 4 図書館は貸出可で、各館 3 冊以内、2 週間以内)とした。伊勢原校舎図書館は館外貸出を不可。

7 . 地域公開サービス相互利用協定締結による本学のメリット

本学学生・教職員の居住地域を問わず、公共図書館で館外貸出が可能になった。大学図書館で所蔵されていない分野や手薄な分野や地方史研究など、相互に特性を活かした図書館活動が拡大している。

資料構成・質の違いを認識することで、レファレンスツールが増えている。

相互理解を深め、相互補完の効果を利用者サービスに生かしている。

8 . 公共図書館との協力体制

提携事業・交流事業の公開講座とは別に、図書館同士が協力し、独自の教養講座を実施している。

市民からの寄贈資料を公共図書館と、資料内容により分担して受け入れている。

本学図書館への寄贈資料のうち、重複資料や内容により公共図書館へ提供している。

今後は一般雑誌の分担保存などの検討を進めたい。

9 . 地域公開サービス拡大後の諸問題

申請受付業務や利用問い合わせが増加している。

カレント雑誌の購読中止などに伴う外部 DB へのアクセス制限や、対象図書館以外の利用など、公開の条件以上のサービスを要求されることがある。

OPAC やコピー機等の取り扱い説明が増えている。

10 . おわりに

所蔵する資料の特色に合わせた情報発信することが、地域の認知に繋がる。

所蔵する資料の高度化、専門化あるいは個性化が、存在感を示す。

館員のレファレンス能力を向上させることで、地域の中核図書館として機能する。

資料構成・質の違いの認識し、相互理解を深め、ネットワーク化による相互補完の効果を公共図書館と一体となってサービス展開することによって、地域社会に根ざす。